

2022年度国外研修報告書

令和5年7月20日
文学部コミュニケーション文化学科准教授
榎本恵子

はじめに

2022年度、フランス、パリでの研修について報告する。

今回の研修出発は、コロナ禍から with コロナへの過渡期であった。2022年3月日本のコロナ感染症陽性者の数は一向に減らず、メディアでは毎日感染者の人数が発表されていた。4月7日、フランスは公共機関を除き、ようやくマスクの使用が任意となったが、日本に入ってくるフランスの情報は芳しくなかった。

住居問題、ウクライナ情勢による各運送会社による運送ストップなど一向に先行きが見えない状態での見切り発車となった。

このような中、到着したパリの空は青く、マスクを外した頬に当たる空気は心地よかった。そしてフランスの大学はアカデミックイヤー2021-22年度の年度末に浮き立ち、モリエール生誕400年祭は1月15日開始から数か月が過ぎようとしていた。

研究目的・研究方法

演劇には、公共のスペクタクルとして、テキストとして、社会事象としての三つの観点が含まれている。高校時代から気が付くとモリエールの作品に縁があり、作品の描き出すメッセージに共感を持ち研究を続けてきたが、常に彼の生きた時代である17世紀におけるモリエールが対象であった。

今回の研修では、ルイ14世治下、モリエールはどのようにフランス王国に貢献したのか、どのようにして「フランス喜劇の父」と称されるようになったのか、モリエールの死後18世紀の受容を検証したいと考えていた。しかし2022年、モリエール生誕400年の節目に海外研修をする機会を得たので、モリエールが「現在」フランスの国民的作家としてどのように認知されているかに焦点を当てることにした。留学中は芝居に行く機会にあまり恵まれなかった。上演される演出の多くが現代的で、時代考証を求めていた私にとってあまり望ましいものではなかったからだ。また、マチネは大学や図書館にいるため難しく、ソワレは帰りが遅くなるから危ないということも理由の一つだった。しかし、モリエールの作品は常にどこかの劇場で上演されている。また、現在でもモリエールの作品は学校教育の中に取り入れられており、課外授業で芝居鑑賞の対象にもなっている。この機会にモリエールの芝居を観ること、観客の反応を見ることが、現代のモリエール評価を知るうえで大切なことであると考えた。

かつてパリ・ソルボンヌ大学の院生の時所属していたフランス語フランス文学研究センター（フランス国立科学研究センター、ソルボンヌ大学連携研究センター、Centre d'Etudes de la Langue et des Littératures Françaises (CELLF / UMR 8599 : Unité mixte de Recherche CNRS / Sorbonne)通称 CELLF の17, 18世紀グループに所属した。ソルボンヌ大学内にラボを構えたこのCELLFを拠点とし、シンポジウム他、主にパリで開催されたモリエール生誕400年の企画に足を運んだ。様々な人と出会って得た「私とモリエールの2022年」をここに報告する。

研究報告

モリエールが現在どのように認知されているかを明らかにするために、今回の研修では、モリエール生誕400年イベントに少しでも多く参加することを心掛けた。図書館に残る文献収集も大切だが、現在進行形の生の資料に触れることは、実際フランスに滞在したからできることであり、コロナ禍と戦争の影響により、渡仏が難しい時期にいる私に課せられたことだと思ったからである。

学会、シンポジウムにも出席したが、本報告書では、研究者に開かれたものではなく、より広く一般に開かれたモリエールの上演、関連展覧会、講演会のうち実際に足を運んだ企画からの報告とする。それはパリがモリエールにとってどのような場所であったのかを提示するとともに、現在のフランスにとってのモリエールの受容を雄弁に物語っているからである。

1. モリエールとパリ

モリエールは1622年1月15日パリで生まれ、1673年2月17日パリで一生を終えた。地方巡業をした1646年から1658年の13年間を除きモリエールの生活はパリにあった。そこで、ガイド付き散策（10月17日）と6月に開催されたシンポジウム「遺産としてのモリエール：神話の様々な使用」で知己を得たパリ第10大学マルシアル・ポワルソン、元コメディ・フランセーズ図書館司書であり演劇史が専門のジャクリーヌ・ラズゴニコフ氏、および彼女の著作『モリエールのパリ *Le Paris de Molière*』（Editions Alexandrines, 2021）、コメディ・フランセーズ見学（10月15日）で得た知識を参考に、実際にモリエールが何を見、感じたのか、どのような環境で演劇活動をしていたのかモリエールの足取りを辿った。モリエールの少年時代と、1658年フランス巡業からパリに戻ったモリエールがどこで活躍し、最期を迎えたのかの2点に絞って分かったことを紹介する。

1) モリエールの生家と学校までの道のり

モリエールの生家はどこにあるのかと聞くと、現在のレ・アル駅の階段出口を出てベルジェ通りとポン・ヌフ通りの交差点にあたる31番地の建物を示される。ちょうどサン・トゥスタッシュ教会を出て真っ直ぐ2～3分歩いたところである。モリエールの胸像のレリーフと共に「ジャン・バティスト・ポ克蘭、通称モリエール、1620年この家に生まれた」と彫られたプレートがあるからだ。20世紀になってプレートがつけられた建物にモリエール自身が住んだことはなく、彼が生家を出た1640年ごろに父親が住んでいたとされる場所である。しかもここに彫られている1620年は1622年の誤りである。

問題のモリエールの生家はこの建物からサントノレ通りを西に二本目を左に曲がったアルブル・セック通り（昔のヴィエイユ・ゼテュード通り）とバイエ通りの曲がり角にある。現在はその形跡はとどめていないが、猿の梁がありパヴィオン・サンジュと呼ばれていた。近くに犯罪者の処刑場（当時は公開処刑であった）のある繁華街があり賑わっていたという。パリ・ソルボンヌ大学とサン・ジャック通りを挟んだところにあるリセ・クレルモン（現リセ・ルイ・ル・グラン）に通うのに、モリエールがこの通りを歩いてポン・ヌフ通りからポン・ヌフ（橋）を渡っていったであろうことは想像できる。そしてそのポン・ヌフはイタリア、フィレンツェのポンテ・ヴェッキオのように車道と歩道があり、幅広い歩道には行商が店を開き、大道芸でにぎわう橋であったことを想定するなら、モリエールが祖父の影響以外にも、学校の往復に大道芸、笑劇に親しんでいたことは容易に想像できる。

2) モリエール劇団の本拠地とモリエールの最期

1658年パリに戻ったモリエールは現在ルーヴル美術館のクール・カレの西側にあるカリアティードの間で御前公演をし、クール・カレ側の東翼、サン・ジェルマン・ロクセロワ教会の間にあったプチ・ブルボン劇場をイタリア人劇団と交互に使うことを許された。

そのころモリエールは、当時はなかったルーヴル・ピラミッドやカルーセル広場近辺に家を構えていた。そして1662年同じ劇団の女優アルマンド・ベジャールと結婚するが、結婚式を挙げた教会はルーヴル宮殿の向かい側にあるサン・ジェルマン・ロクセロワ教会であった。

プチ・ブルボン劇場が取り壊されると、元ルイ 13 世の宰相リシュリューの城館パレ・カルディナルの劇場、パレ・ロワイヤル劇場を使うこととなった。現在の連邦政府庁舎の東側である。プレートには1661年から1673年までモリエール劇団が使用したと記されている。ちなみにこのパレ・ロワイヤル劇場はモリエール亡き後、リュリ率いる王立音楽アカデミーが1763年まで使うこととなった。

モリエールはこの劇場の舞台上で息を引き取ったという、役者冥利に尽きるエピソードがある。けれども実際はアリアンヌ・ムヌーシュキンの映画「モリエール」にも見られるように舞台上で死んではいない。新作『病は気から』4回目の公演の最終幕で咯血し気を失い、幕が降りると家に緊急搬送された。部屋着に包まれ、座っていた椅子ごと運んだ。現在コメディ・フランセーズのロビーのガラスケースに設置されているのがそのレプリカである。

モリエールが搬送された家は上演していたパレ・ロワイヤル劇場を出て右に曲がり現コメディ・フランセーズを通り過ぎてさらに右に曲がった右手、リシュリュー通り40番地にある。「モリエール（パリ1622年1月15日生、1673年2月17日没）の家があった場所」というプレートが残っている。現在、建物は貸しスペースになっている。12月7日から11日までバロン・フィリップ・ドゥ・ロッチルド（ロスチャイルド）によるボルドーワイン、ムートン・カデの90周年イベントが行われた。

向かいのモリエール通りとの交差にあたるミレイユ広場では脚本とペンを持ち椅子に座ったモリエールの像が設置されている。1844年コメディ・フランセーズの正座員フランソワ＝ジョゼフ・レニエによって進められた噴水広場で「モリエールの泉」として知られている。左右に立つニンフの手にある巻紙にはモリエールの作品とその初演年が彫られている。モリエール年にあたり2022年磨かれた。

2. コメディ・フランセーズ、通称「モリエールの家」の2022年

コメディ・フランセーズは、モリエールの死後、パレ・ロワイヤル劇場を使えなくなったモリエール劇団が国王の命でゲネゴー座とオテル・ド・ブルゴーニュ座と合併して出来た王立劇団である。当初はアルシーヴ通り60番地にあったゲネゴー座を使っていたが、1799年、現在の場所（コレット広場）に移った。

モリエールの死後にできたにもかかわらず、モリエール劇団が中心であったことでモリエールが最初の初代名誉座長となっている。コメディ・フランセーズの劇団員は設立当初のメンバーから連番で、現在最後に任命された正座員は538番、現在37名所属している。2023年1月15日新たな正座員が2人（539, 540番）増え、5月14日1人（515番）退団し38名となった。

コメディ・フランセーズは、劇作家兼役者兼劇団の座長でもあるモリエールを劇団の規範とし、その魂を引き継いでいる。18世紀から通称「モリエールの家」と呼ばれるようになった。没後100年の1773年初めてモリエールの記念祭を催した。19世紀になりモリエールの洗礼を受けた日が明らかになると毎年1月15日に生誕祭を開催するようになり現在に続く。

2022年は1月15日、イヴォ・ヴァン・ホーヴェ演出による復刻版『タルチュフ』公演を皮切りに7月25日の6か月間、「モリエール年」としてモリエールの作品のみの上演を行った。

モリエールの作品から『タルチュフあるいは偽善者』、『人間嫌い』、『病は気から』、『守銭奴』、『スカパンの悪だくみ』、『町人貴族』、『才女気取り』、『ゴリ押し結婚』、『ドン・ジュアン』の9作品、生誕400年祭を記念して新たに創作された『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』、『猿たちの黄昏』が上演された。

そのうち私が見た作品は、パリ到着前に上演が終了していた『ドン・ジュアン』、『病は気から』、『町人貴族』、『猿たちの黄昏』の4作品を除く7作品である4月中旬、7月末までのすべての公演のチケットが既に完売であった。そこで当日券で購入することになった。

当日券は、公演1時間前に「プティ・ビュロ」と呼ばれる劇場脇の小さな窓口で販売される。一律5ユーロで、水曜日、学生は無料となる。あるいは別の受付でやはり公演1時間前からの対応になるが、招待客などのキャンセルが生じたときに定価で販売される。しかし今回いずれの公演も、1時間前に来ても長蛇の列で購入できなかった。2、3時間前から並んでチケット入手率は五分五分であった。2022-23年のシーズンはモリエール以外の作品も上演される通常運転になったが、それらは数日前でも席が残っていてチケット入手はそれほど難しくなかった。いかにモリエールが人気であるかが証明されたといえよう。チケット入手経路は以下のとおりである。

1) 『タルチュフあるいは偽善者』イヴォ・ヴァン・ホーヴェ演出

4月25日千秋楽、1時間半待ちで3階席の端の席が取れた。幕間なしの公演2時間の間ずっと背伸びして立って見たが、それでも舞台の3分の1しか見られず、「観る」というより「モリエールを聞く」という表現がふさわしかった。

この作品は2022-23年のシーズン1月31日から3月19日再演された。2022年6月に2月までのチケット販売が行われたが、夏休み明けの9月なら間に合うだろうと思っていたのだが、その時すでにほぼ満席状態となっていた。より良い席で見たかったために2時間並んで当日券を購入、3月5日観劇した。「モリエールを聞く」と役者の演技付きで中央で観るのどこまで印象が違うのかというところを実感した。

2) 『人間嫌い』クレマン・エルヴィユ＝レジェ演出

1時間待ちでチケットが取れず、帰ろうとしたとき、たまたま前に購入していたが結婚式出席のために来られなくなった家族の分のチケットを持ってきた人にチケットをもらうことができ観劇した。半年以上前に予約することのデメリットが出た例だということができる。

3) 『才女気取り』ステファン・ヴァリュペンヌ、セバスチャン・ブドゥール演出

ヴィユ・コロソヴィエ劇場での公演で1時間半待ちして4月27日観劇した。この劇場のよいところは、来た順に受付で記名しておけば、席を外すことができるところだ。おかげで待ち時間が苦にならなかった。

4) 『スカパンの悪だくみ』ドニ・ポダリデス演出

1時間半時間待ちした4月26日はチケット入手できず、29日に、2時間半待ちで入手した。オーケストラ席を入手できた。やはり、これくらい待たなければならないのだなと思った回であった。

5) 『守銭奴』リロ・ポール演出

4月28日、1時間半待ちでチケットを入手できなかった。助言通り2時間前から並んだが、7月24日が千秋楽であった為か、3階席しかなく、舞台3分の2の視野であった。

舞台後、カフェで主演のローラン・ストケールと知己を得た。来日経験があり、共通のフランス文学者がいることで話が弾んだ。

6) 『ゴリ押し結婚』ルイ・アルヌ演出

劇場はルーヴル美術館地下にあるステュディオ劇場上演であった。ルーヴル美術館の地下の観光客が行きかう通路の脇にあり、そこだけ「地元のパリ」があるような感覚があった。『決してアルセストにはなれない』の当日券が取れなかったとき、次の公演『ゴリ押し結婚』の前売りが残っていたので購入した。初めてチケットを持って劇場に行った作品である。

初日 5 月 26 日だったため、公演後、2 階のラウンジで役者、演出家やその知り合いが集まっていて、演出家と話をする機会を持つことができた。また、芝居が終わった後急いで外に出る役者を何人か見たが、それは 20 時から始まるリシュリュエ館の公演の出演者であった。劇場の名前が説明しているように、この劇場で上演される演目はかなり挑戦的なイメージを受けた。

7) 『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』ジュリー・ドリケ演出

『守銭奴』でアルバゴンを演じた俳優ローラン・ストケールから連絡をもらい、前売りで購入して 11 月 8 日観劇した。1 月 15 日の千秋楽といずれもオーケストラ席で 2 回見たが、脇からの視点、中央からの視点を経験した。

8) モリエールへのオマージュ

2023 年 1 月 15 日、『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』千秋楽の後、モリエールへのオマージュが行われた。

この日は無料となり、何時間待ちしてよいのか劇場関係者すらわからない。ローラン・ストケールの招待で中央席から観劇した。

オマージュは、コメディ・フランセーズ公式 YouTube でも見られるが、迫力や空気は実際に共有しないとわからない。コメディ・フランセーズ正座員と準座員が勢揃いした舞台は圧巻であった。俳優は今年度上演した時の衣装を着けて、一人ずつモリエールの芝居から一節を朗読した。役者の中には久々の集合に楽屋で話す人たちもいたが、招待客と 2 階のレセプション会場で団らんした。芝居を見ただけに、俳優、支配人と意見交換できたことは大変興味深かった。その時支配人にインタビューする許可を得た。

何回か劇場に通うようになると、劇場スタッフと顔なじみになり、話をするようになった。何度も顔を合わせるとそこに親しみが生まれ、会話が成立する。そのスタッフたちの名前は知らない。聞けば教えてくれたであろうが、彼らとは、「友達」になるのではない。「いつもの劇場」に行き、「知った顔」と会話し、芝居を見て、帰りの挨拶をして帰る、ここまでが「観劇の時間」となる。全然知らないところに初めて行くのとは違い、得も言われぬ居心地の良さがある。それが何ともくすぐったく、嬉しかった。

3. コメディ・フランセーズ以外で観劇したモリエール作品

コメディ・フランセーズにおけるモリエール作品の演出は現代的なものが多い。では朗読法を含む当時の再現を舞台上に復刻することはないのかということ、1990 年代から始まっている。評価は賛否両論である。2022 年に上演されたのは次の三つの劇団である。

1) カンパニー・オグマ『ル・バルブイエの嫉妬』

カンパニー・オグマは2006年に創設、本拠地ドルドーニュ地方を中心にバロック期、ルネサンス期（15～17世紀）の劇作品と音楽を当時の朗誦法、演劇法を再現して上演しているプロの劇団である。

2022年5月21日、パリ、マザリーヌ図書館の協力で『ル・バルブイエの嫉妬』を上演した。学士院の中庭に設置された野外劇場で20時30分開始した。日が長いため、まだ明るい中上演が始まり、21時30分を回ると建物の回廊に明かりが付き、22時を過ぎると夜の帳の中、回廊の明かりと舞台前の蠟燭の光の中役者たちが照らされた。朗誦法だけでなく、屋外ならではの時間による雰囲気の変化も楽しめた。

2) パリ・アテネ劇場『ジョルジュ・ダンダンあるいはやり込められた亭主』

ミシェル・フォー演出で5月6日から29日が上演され、13日に観劇した。通常三幕散文の部分しか上演しないのだが、1668年のルイ14世のヴェルサイユの祝宴での公演を再現し、幕間劇を含めた「音楽とバレエ付き喜劇」であった。朗誦法は現代風であったが、幕間の歌と踊りは当時を彷彿させる演出となっていた。

3) テアトル・モリエール・ソルボンヌ『病は気から』

2017年に発足したテアトル・モリエール・ソルボンヌは名前の通り、ジョルジュ・フォレスティエのもと、パリ第4・ソルボンヌ大学（現ソルボンヌ大学）の後援を得て作られたバロック演劇養成学校で、文献学に基づいた17世紀の演劇法の研究と実践を行っている。役者の演技、朗誦法の他、音楽、舞踏、衣装、舞台装置などを含めた復興を目指している。モリエール生誕400年を祝して、2022年は『病は気から』をヴェルサイユ宮殿王室歌劇場、国立図書館、パリ大学都市公演で上演した。2023年2月のヴェルサイユ・モンタンシエ劇場公演が最後の上演となった。

ヴェルサイユ宮殿王室歌劇場は渡仏前の上演であったため見られなかったが、恩師ジョルジュ・フォレスティエ教授に、各劇場は大きさや設備が異なるため舞台背景、演出がすべて微妙に異なると聞き、すべての公演を見た。

12月6日の国立図書館では講演会場を劇場舞台に仕立てていた。オーケストラボックスがないため、指揮者をはじめとする楽器演奏者の頭が舞台上に出てしまっていた。

12月15日の大学都市公演は、小劇場を使っていたために本格的なセットを使うことができた。国立図書館の公演では、時間の関係で割愛された主人公アルガンと娘ルイゾンの場面があったり、舞台がより大きくなったため、幕間の踊りや舞台転換時にアクロバットを入れることができた。

2月のモンタンシエ劇場にはゲネプロ2月16日と千秋楽2月19日見に行った。18世紀の劇場であるため、より舞台背景と劇場内の調和がとれていた。フォレスティエの他、演技指導のミカエル・ブッフアーにインタビューすることができた。現代とは違う背景の構造、舞台奥が高くなっている斜め舞台を見ることができた他、役者たちに舞台の違いによる演じ方の難しさなどを聞くことができた。

4) オペラ・コミック『町人貴族』ジェローム・デシャン演出

オペラ・コミックでモリエールのコメディ・バレの集大成と言われる作品がどのように演出されるのか興味深かった。2020年に上演される予定であったが、コロナ禍中止になったもので、その後複数の劇場で上演されたものの再演となった。この演出は前述の演出とは異なり、ジェローム・デシャンによる現代版笑劇を見ているようであった。俳優兼演出家はテレビなどでギャグやコントで笑わせることでも知られるジェ

ローム・デシャンで、原作からは全くかけ離れた世界観であった。観客の反応から「ジェローム・デシャンの『町人貴族』」を見に来ていることが分かった。

4. 展覧会・講演会

フランス国立図書、パリ国立オペラ、国立舞台衣装センターがコメディ・フランセーズと共催して展覧会を開催した。それぞれの趣旨と展示内容から、モリエールが劇作家（文学）、コメディ・バレ（音楽）、上演（衣装芸術）の分野において評価される人物であることが見て取れた。

1) ムーラン市の国立舞台衣装センター「舞台衣装から見るモリエール」展（11月3日見学）

ムーラン市はパリから列車で2時間半にある。クリスティアン・ベローやクリスティアン・ラクロワなどが手掛けたコメディ・フランセーズの舞台衣装をテーマごとに130点余り展示されていた。ヌレエフの常設展もあり、そこでヌレエフ振付の『町人貴族』の写真を見たことは驚きであった。

2) フランス国立図書館リシュリュー館「モリエール、演技の真と偽」展（9月26日見学）

展覧会前日のオープニングセレモニーに、関係者たちと見学した。17世紀から今日までの公演時に配布されたパンフレットや版画、資料、絵画、舞台写真、衣装、舞台模型などが展示されていた。また、6月のシンポジウムの時紹介されたドン・ジュアンと対話するITのプログラムが完成されており、制作時の裏話を想起しながらの体験は興味深かった。

3) パリ・オペラ座「音楽の中のモリエール」展（9月27日見学）

シャルパンティエの自筆の『病は気から』の楽譜、振り付けの記譜をはじめとするコメディ・バレのポスター、版画、現在までの演出に関する衣装デッサン、舞台装置のデッサンなどが展示されていた。シャルパンティエの楽譜は前述の上演『病は気から』を考案するのに重要な資料となったもののひとつであり、それらを目にするのは感慨深いものがあった。

4) フランス国立図書館の展覧会開催にちなんでリシュリュー館で開催された講演会

10月13日「モリエール / コルネイユ」（ジョルジュ・フォレストイエ、ジャン＝バティスト・カン、アンヌ＝ロール・リエジョワ）、11月14日「モリエールを演じる」（アリアヌヌ・ムヌーシュキンの『モリエール』にモリエール役で出演したフィリップ・コーベール、コメディ・フランセーズの『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』脚本・演出のジュリー・ドリケ）を傍聴し、講演会后、登壇者に話を聞くことができた。12月6日には前述のテアトル・モリエール・ソルボンヌによる『病は気から』の公演があった。

5) パリ大学都主催のモリエール講演会

パリ大学都市は12月1日「『病は気から』上演の昔と今：何が問題か」（ジョルジュ・フォレストイエ、ミカエル・ブッファー）、12月8日「幻想の中のモリエール—伝説が作り上げた神話」（マルシアル・ポワルソン、マルセル・ボゾネ）、12月15日『病は気から』上演を企画した。『病は気から』の上演は前述のテアトル・モリエール・ソルボンヌによるものである。

5. インタビュー

1) コメディ・フランセーズ支配人エリック・リュフ

1月15日のモリエールへのオマージュの後のレセプションで了解を得ていたことから、正式にオファーをし、インタビューが叶った。3月8日10時から2時間時間である。聞いていた通り話好きの気さくな方で、コメディ・フランセーズのモリエール年の企画についての他、なかなか聞きづらい金額の話や、裏話まで聞くことができた。役者として、また支配人としての運営法などを聞くことができ、研究者としての考えとは異なる劇場運営者側からのモリエール評価を知ることができたことは大変有益なことであった。

2) 国立図書館舞台芸術セクションジョエル・ユースウェル

6月のスリズィでのシンポジウム開催者のひとり、ジョエル・ユースウェルは国立図書館リシュリユー館主催「モリエール、演技の真と偽」展の責任者の一人であった。3月21日にインタビューが叶った。こちらも、シンポジウムでの研究者としての意見と大衆向けの展覧会および付随する講演会の開催の意図を聞くことができたことは、貴重な体験であった。

6. パリの文化体験

年間を通じていなくては体験できない季節の行事の中で、研究および授業に関連する体験を紹介する。

1) フランスの中の日本

7月パリで開催されるアジアの今を紹介する「ジャパン・エキスポ」（7月17日最終日）や、時折開催される日本食、日本酒、日本文化紹介のイベントに参加することで、現在のフランス人の日本に対する興味を体験した。

2) 文化遺産の日

9月の第2週末に開催される文化遺産の日には、普段中に入れないパリの現在使われている歴史的建造物の中に入ることができる。ルイ14世の誕生を感謝して作られたヴァル・ド・グラス、パスカルやラシーヌが眠るサン・テティエンヌ・デュ・モン教会、ラ・ロシュフコーの蔵書があったアンリ4世校、リシュリユーの墓が安置されているパリ・ソルボンヌ大学の礼拝堂など、17世紀関連の建造物を見学し、現存するルイ14世治下のパリに触れた。

3) 白夜祭

白夜祭は2002年から始まったコンサートなど文化的な催しが行われるイベントで、毎年10月の最初の土曜日か日曜日に夜通しで行われる。2022年は10月1日に開催された。様々な場所で開催される中、レ・アルを中心に回った。サン・トゥスタッシュ教会では厳かな教会に白い天使の羽のようなオブジェとその下で現代的なパントマイムが、レ・アルではファッションショー、リヴォリ通り53番地では芸術家の卵の前衛的な展覧会、ジョルジュ・ポンピドゥーセンターではシャボン玉のオブジェ、フランス国立公文書館の綿あめ実演イベント、様々な教会で開催されるウクライナやテノール歌手のミニコンサートなど、道すがら様々なイベントを見て歩いた。開催初期に何度か行った経験があるが、その頃より規模が拡大し、カジュアルから文化的なものへとジャンルが広がっていた。

おわりに

今回の研修は学生ではなく、一人の外国人女性がパリで生活することという点が留学の時と大きく異なった。「学生」という特別な身分ではなく、「大学都市（選ばれた各国の留学生のための寮）」という守られた場所ではない「現実のパリ」を体験し

たことは私にとって、とても大きな経験となった。同時に大学でフランス語を学び、フランス文化に興味を持つ学生たちに「今のフランス」を伝える貴重な体験ともなった。

開けた国として知られるフランスであるが、様々な分野での差別があることは知っていた。けれども今まで、自分がそれを体験することはなかった。しかし初めて、女性であること、単身であること、国籍の違いによる差別を、身をもって体験した。そしてそれが、「フランス社会において生きる」ことに紐づくところであることが分かった。

反対に日常生活においては、いつも人々の温かい心に触れた。「パリ症候群」が話題になって早30年、今でも存在するが、日本人がギャップをもって感じる「冷たさ」を私が感じたことはほとんどなかった。銀行にしろ、スーパーマーケットなど店の従業員にしろ、レストラン、駅、公共交通機関、マンション管理人などを含め、人のやさしさに包まれた1年であった。

そして「現実のパリ」で、教育・研究機関だけでなく、様々な職種、年代の人と共に彼らの「国民的作家」モリエールの生誕400年を過ごすことができたことは感慨深いものがある。そして今までの文献学的研究から、立体的にモリエールを見る視点を得たことは、研究者として大きな実りとなった。

謝辞

コロナ禍から with コロナへの過渡期でもあり、ウクライナ情勢が悪化し始めたころの渡仏でした。帰国前の2月、3月は、年金制度改革反対のデモが隔週あり、デモの日は68年の二の舞にならないようパリ・ソルボンヌ大学は門を閉め、講義も休校や遠隔授業となりました。街にはゴミが溢れ、デモの規模も大きくなっていきました。物価が上がり、友人たちとの会話には必ずそのことが話題に上るようになりました。今回の渡仏は、ITや技術の発展で世界が近くなったと思っていた数年前までとは比べようもなく、世界が再び遠くなったのを感じたものです。

学生の時にできなかったことをいろいろ体験できた素晴らしい時間でした。やり残したことがたくさんあり、留学時以上に時が早く流れるのを感じました。そして、人は一人では生きていけないのだということを実感し、人の温かさを感じた時間でした。無事にこの研修を終わらせることができたことは、友人たちの助けがあったからです。本当に学びと感謝の日々でした。

また、本研修の準備期間、手探りの中、細やかに相談に乗ってくださった大妻学院のすべての職員の皆様、コミ文の先生方に感謝します。

渡仏のための公的手続きの際の部署盥回し事件に、鶴の一声で解決してくださった恩師ジョルジュ・フォレストイエ教授、在日フランス大使館の友人に感謝します。

まさかの住居問題に日本にいるときから、部屋が見つかる6月末まで、部屋を貸し、相談に乗り、入居までの立ち合いの場に同行してくれた友人たちに感謝します。

研究以上に、人間として様々な経験を積んだ一年でした。改めて私の人生を豊かにしてくれた様々な環境とすべての人に感謝します。そしてこの研修の機会を与えてくださった大妻女子大学に深く感謝申し上げます。